

【母性愛とポジティブな投影同一視】 (1988)

Meira Likierman

《原題; Maternal Love and Positive Projective Identification》

この論文の主題となりますのは、精神分析的理論においてほとんど注目されることのなかった母性愛 maternal love の或る側面についてであります。すなわち母親の、子どもによって投影されるフィリングを受容する能力というよりも、むしろ彼女自身の愛するという情動 loving emotions の投影について語ろうと思います。

現時点でのわれわれの母子関係を巡っての見解はどうやら一方に偏したものではなかろうかと考えられます。そこでは母親の受容的 responsive なありようが殊更に重要視されております。因みに、いわゆる「the 'good enough' mother」(‘ほど良い’ 母親) (Winnicott, 1960) について描写されておりますのは大概のところ、子どもの投影を受け取り、‘抱え入れ’、そしてコンテイン contain するという母親の能力を考慮に入れておまして、それらはすべて受容的なプロセスと言えましょう。‘ほど良い’ 母親というものが子どもに伝えるものが何であれ、その中身は子ども自身の投影したものが‘よく消化され digested’、こなれたものに加減され、それで子どもにとってどうにか咀嚼し飲み込めるかたちとなって戻されたもの、概してそのように感じられております。

しかしながら、ごく普通に人と人とは関係している際に個々が抱くところの自己表現のニーズ individual self-expression といったものは、単純に受容的なありようで満たされるとは申せません。たとえ母親のフィードバックが愛情によってコミュニケーションされているにしても…。ここで盲点とされております事柄は、母親自らの良き愛する部分 the good loving parts を示したい、表したい、さらにはそれらが認められ、かつ尊ばれたいと願うといった母親の‘自己愛的なニーズ narcissistic need’ であります。われわれ大人同士ならば、お互いパートナーが相互に自己表現をするニーズがあることに疑いを入れません。しかしながら、母親の自己表現のニーズというものが子どもの発達に何かしら貢献するものか否か、それを見極めるのはどちらかという点で困難でありましょう。

たぶんそれが困難とされるのは、子どものこころ psyche に母親の情動的引きこもり maternal emotional withdrawal がもたらす有害な影響についての精神分析的な知見に根深く起因しておりますでしょう。そうした引きこもりは、幾つかの要因から派生しており、それらのうちの一つが母親の抑うつであります。子どもにとっては基本的に極めて深刻な心的剥奪が意味されます。殊にそれは、子どもの動揺やら攻撃欲に対しての‘コンテナ container’ になるべく母親の能力を途絶させてしまします。子どもは、まだ脆弱な新生児のこころ psyche が対処しきれない、打撃的ともいえるほどの不安感に一人で耐えねばならないわけです。これは、子どもの精神発達面の全体に深刻な影響を及ぼし

ます。そうでありますから、‘コンテインメント containment’という概念が精神分析の大きな関心事であり、そこでは母親の受容的な能力が多大な重きをなしているのは決して不思議ではありません。しかしながら、‘コンテインメント’が理解されているまさにそうしたありようには、受容的といったことに限らず、母親の相互作用の他の側面についてもさまざまな意味が含まれていると考えられるのです。それらの側面が、‘コンテインメント’という概念を掘り下げてみることで、まさにその定義においてどのように示唆されているかについてこれから述べてみたいと思います。

コンテインメント

コンテインメントの重要性とは、母親の無意識的な想い unconscious phantasy において、子どもから投影されたところの恐怖で溢れんばかりの衝撃を受容し、その意味 meaning よりもむしろそのクオリティ quality(質)を経験し、そうすることでそこに緩和されるべきエッセンスを見極めるといった母親の能力にあります。そうしてから母親は大人としての思考能力を用いて、この情動的経験を概念的にコンテインされたものへと変形 transform し、そしてその投影されたものを‘咀嚼し’、よくこなれた内容に加減して子どもに‘フィードバック’するのです。そうしたフィーディング・バック feeding back は無意識な心の営みであり、ビオン(1962)によって【**reverie**(もの思い)】と名づけられました。そこでは子どもを気遣う母親のフィーリングの伝達 transmission が伴われるのでありますが、飽くまでも彼女の意識的な意図やら考えではなく、そうしたフィーリングが内に孕むところの‘こころのクオリティ psychical quality’ (Bion, 1962)の伝達なのであります。

我々は、子どもがどのようにして‘こころのクオリティ(質感)’を把握するものか、よくは承知しているとは言えません。が、われわれの臨床において逆転移 the counter-transference を経験することからしても、人間は、言葉やら行為といった媒体を介さずとも、個々にお互いの無意識的状况を伝達できるということを知っております。こうした伝達 transmissions は実に強力であります。おそらくは無意識裡にコミュニケーションされるという事実の故ではなからうかと思われます。そういうわけで、それらは思考機能 thinking functions によって変容されないままのフィーリングから成っていると断言していいでしょう。

こうした原初的なコミュニケーションは、概念的かつ言語的コミュニケーションより以前に遡るものであります。子どもにはそれしかないと言えましょう。言語を習得する以前に、子どもは母親から、その相互的な関わりのなかで彼女が伝えようとする‘フィーリングのこころのクオリティ psychical quality of feeling’を、敢えて申せば‘掴み取る’のであります。このクオリティこそが、子どもに安心感をもたらし、コンテインするものとなるのですし、‘reverie(もの思い)’と一緒に、母親が子どもの心に触れようとするための手段となるのであります。彼女は言葉をとおして子どもにコミュニケーションすることが未だできません。そして彼女の身体的な扱い、それが子どもにとってどれほど癒しとなり、かつ不安をなくすものであったとしても、それだけでは不十分であります。彼女の相互的交流には心の次元を含むところのパーソナルな、かつ情動的接触がなければならないのです。

‘もの思い reverie’は、無意識裡に経験されるものであり、かつコミュニケーションされるものでありますから、それは転移のプロセス *transferential process* とも密接に関連付けられるものであります。転移 *transference* とは、臨床的に名づけられたものにすぎず、実のところ、診察室の外にも広く存在する現象であります。個々人は、意識的に、おとなとして他者に関係づけをしながらも、絶えず今・ここに絡ませながら、早期の心的状態を‘転移させている *transfers*’ということになります。いかなる関係性も原初的な衝動性によって汚染されてないものは無いと言っていいでしょう。そしてこのことは、家族内で、また組織体もしくは政治的なシステムの中でも生じる、しばしば不合理としか言いようのない特有な気風を説明もいたします。それは論理的な、成人同士の相互作用からはとても説明できないわけです。母親たちもまた、原初的な心的状態を、その関係性において転移させることをいたします。そして子どもがこうした転移から除外されているわけでは決してありません。

ここで私は、母親の子どもと関わる上での無意識的な相互作用には2つの重要な側面があることを語ろうと思います。一つは‘もの思い reverie’であります。それは子どもにこころのケアを原初的かつ‘動物的’に直観で伝達するものですから、転移のようなもの *transference-like* といえましょう。これは‘コンテインメント’を下支えするプロセスであります。それからもう一つは、厳密な意味での母性的転移そのものであります。すなわちここでは、思考やら修正的機能とは違って、母親自身のフィーリングに孕まれている‘こころのクオリティ’がそのまま子どもへと伝達されます。このようにして母親によって差し出されるものとは、彼女の‘利己的 *selfish*’な愛情であります。それは、彼女が感じるところのフィーリングが他の誰かによって受け止められたいといった自らのニーズから生じており、それは普通に人がごく自然に誰かを愛する中で、自己の良きもの *goodness* を他の誰かのために表したい、そしてそうした愛情のこもった良きものが他の誰かに受け取られ、かつ喜ばれたいといった欲望に根差しているわけです。そもそもが自己愛的 *narcissistic* でありますから、こうしたニーズは、愛情に溢れる良き自己の部分を絶えず日常的な相互的な交流において表出することを希求しますし、また個々人はそれぞれに生きてる現実を味わい、そしてこの現実が他者によっても認めてもらえることで、それらの表出から大いに満足を甘受することを保証しているともいえましょう。

母親というのはごく普通に、子どもとの関係性においても又、自らの良きものが認められたいと感じているものです。この意味するところはすなわち、育児に懸命に励んでいることを知ってもらいたいということに限りません。その受容的態度よりもむしろ自然な発露において、‘こころのクオリティ’が受け止められることを母親は欲しているのであります。そして、自分が受容的でケアを与える人としてだけでなく、母親としてステキに感じてもらえるとか、それやら慈しみ愛することを機能的にというよりむしろパーソナルに求められる、そのような人として存在していたいということなのです。

こうした見解が一応了解可能なものである一方、子ども自身から投影された内容物を咀嚼し、さらには緩和させ、それらを子どもへと伝達してゆくといった相互交流するだけの、受容的な‘抱える *holding*’人以外の何者かとして母親を考えますと、いくら落ち着かない気分になります。そうしたこと

を認めるのが何故に気が進まないのかは、「母親の転移的反応 maternal transferential responses」が臨床上の見地からして、病理的な兆候として見做される事実があるせいと思われる。未熟な母親たちが子どもを自らの混乱を極めた投影の対象として利用し、その結果子どもは彼女らの‘親になってあげなくてはならない’事態に陥っているということがあります。こうした子どもは、侵入的かつ損傷を招くともいえる「母親からの投影」の集中砲火を浴びていることになるわけです。

勿論のこと、ここでそうした明らかに深刻な面から眼を逸らすつもりはありません。しかしながら私は、コンテインメントおよび‘抱えること holding’と並行して、またそれと同じ程度に重要なものとして、愛情が子どもに感じさせるところの‘こころのクオリティ’なるものを、さらにはこのクオリティが原初的かつ自己愛的に転移されて子どもに伝わるということを指摘したいのであります。母親は彼女自らのために子どもを愛するのであり、子どもをコンテインし、かつ抱えるのは子ども自身のためにであります。コンテインメントそして抱えることは、為さねばならない仕事 work であります。そしてそれは母親の誰しもが承知しているように、決して軽んずることの出来ない大変な労苦です。子どもを愛することは‘自己愛的 selfish な’嬉しさ pleasure なのでありまして、純粋に自己表現的であり、母親自らの伝え合い transmission ということになります。それは、子どもの要求を充たすために手を尽くすこととは本来無縁な「フィーリングの表出」とも言えましょう。子どもからもたらされた投影やらニーズに端を発するものではなく、それは母親自身のニーズに深く根差して湧き出るものであります。そしてそれらのニーズとは、母親が赤ちゃんを愛してるからということではしかありません。それこそが重要なのです。

もしわれわれが母親の子どもへの反応を総体的に眺めて、その中に原初的な側面を含ませることをしないとすれば、二通りにおいて歪曲を犯す危険がありましょう。一つは、すべての原初的衝動が精神レベルで‘削除’され、純粋に利他主義者として理想化された母親といった人工的な絵空事をつくり出すこと。二つ目には、子どもは純粋な‘利他主義’を必要とし、そしてポジティブな類いのこころへの侵入 intrusion からは何ら利益を得ることなぞないと見做すことであります。

私は、それとはまるで逆なことをここで指摘したいのです。すなわち母親の子どもへの原初的な転移的愛 transferential love とは、そもそも子ども自身のものでもなく、また子どもが泣いてせがんだものでもない、その真正の「ポジティブなフィーリング」を子どもに伝える重要な機能をもっているということです。それらは子どもの中へと‘押し入る intrude’ともいえましょうが、敢えて申せば‘思いがけない贈り物’といった嬉しさを提供するのであります。それは子どもが自ら呼び込んだものではないからです。そしてそれは、子どもに‘何かをもらうことの経験’をもたらします。無理矢理せがんで奪い取った嬉しさとは正反対であります。それはまた子どもにしてみれば、世話されているというよりもむしろ自分が求められているといった経験をもたらします。彼はニーズの対象であります。単に自分が必要としているばかりの存在ではありません。それに、絶えず母親の心 psyche からポジティブに感化されていることは子どもにとって根本的な意味で安心をもたらします。なぜなら、母親は子どものことを記憶にとどめていてくれるだけでなく、たとえ一緒にいなくとも心に掛けていてくれており、そしていつ何時もフィーリングを吐露

すべき機会があれば喜んでそうするだろうといった事を子どもに分からせてくれるからです。それにこちらの方が、いわゆる信頼に足る母親というのが、子育てに大いに意欲的であっても、子どもとの触れ合いへ向けてパーソナルで‘自己愛的な’ニーズを伝えることがないとしたら、むしろ格段に安心をもたらし、慰めとなるに違いないと思われるのです。

ここで、1歳を過ぎた2人の子どもとその家族について観察したことがらを語ってみたいと思います。彼らはどちらも『the Under-Five Counselling Service at the Tavistock Clinic』からの紹介で来所しました。一人の子どもは概して健康な男の子であり、ニーズの対象 a object of need として関わっているところの母親に属してると言っていいでしょう。もう一人の女の子の方は、混沌としていて極度に攻撃的でありました。やがて知るところでは、母親は彼女自身の経験からして極度にアンビヴァレントであり、子どもとの関わりにおいて何ら自己愛的な喜び selfish pleasure を伝えることは出来ずにいたのです。

これらの家族について語る前に、しばらくここで「転移現象 transference phenomena」のより原初的な特徴に戻ってみたいと思います。そして、それらがごく普通に母性愛においてどのように機能し得るものか描写してみることにいたしましょう。

転移および投影同一視

クライン派の伝統的な思考において、転移が言及される場合、その主要なメカニズムは「投影同一視」(クライン、1946)であります。この用語は、具体的に個人によって想起されたところの、無意識的投影のプロセスを意味しております。人は実際に自らの情動もしくは心の他の部分をも別の誰かへと投げ入れることを知っています。恰も誰かの内側へと入り込み、かつ影響を及ぼすといったふうに、それらは具体的な実体のように感じるのであります。これらの具体的な投影 concrete projection を受け取った対象 the object は、それらの特徴に彩られ、想像の中で自己 the self にそっくり似たものとなり始めます。つまりは、それと同一視するということが起こるのです。こうしたことの起源は早期の乳児期に遡ります。情動と心の現象が自己の具体的な部分 concrete parts of the self と同等に見做される時期であります。明らかにそれは想像 phantasy に過ぎません。自己の部分は実際のところ他者の内へと忍び込めるものではないからです。そして実に、クラインは‘～へと投影する project into’ということばを概念に唯一言語的に近いものとして用いたことを悔やんでおります(1946)。しかしながら、この用語は今や多くの人によって採用されております。幾分それが空想の内容を正確に描写しているからであり、また他にもそれが強烈に感じられるクオリティを伝えているからでもあります。もしも本当に自己の或る部分が他の誰かの中にあると感じられるならば、それはもはや他の誰とも何ら関わりのない、単に‘意地悪な思い込み nasty thoughts’として軽く見過ごすわけにはゆかず、大いに事件を引き起こすことにもなりかねない恐怖といえましょう。しかしながら、現実には個人がそうした心 psyche を他者へと感染 transmit させることは所詮無理だとしても、そのクオリティ quality もしくは‘感じ feel’は伝えられます。転移が逆転移を招くのはそうしたことに拠っているわけです。想像のクオリティ

quality なるものは人に影響を及ぼすのであります。その意図が意識的にしろ、無意識的であろうと・・。意識的には、彼はわけも分からずに居心地の悪い気分がしてくるかも知れません。無意識的には、何かしら‘悪い bad’ものもぐり込んできたといった空想を懐くことになるかも知れません。このように主体の空想と対象の経験との間には一致 correspondence があるのです(同等 equation ではないものの・・)。だが再びここで、こうしたコミュニケーションのパワフルな性質を強調することは重要であります。それは‘正気ではないinsane’空想でありますから、何ら害のないナンセンスとして退かれることにもなりましょう。しかしながら、それに伴うところの純然たる強度 intensity からして、それが情動的には侵入的 intrusive であり、受け取る者にとっては、決して言葉では言い表せないとしても、断然心を乱すことがあり得るということの意味しています。受け取る者がそうした考えを論理的に不合理として斥けるとしても、侵入的かつ敵意を孕んだフィーリングを斥けることは容易ではありません。

Rosenfeld(1987)は、「投影同一視」がどのように多様な目的のために使われ得るかを語っております。それらの一つは、精神的な実体を対象‘へと into’空想投影 phantasy projection することですが、それは、自己 the self から排出したところのそれらを対象 the object へと侵入させかつ危害を加える、もしくはその内側からそれを支配せんがためといった目論みであります。しかしながら、Rosenfeldはまた、投影同一視には、より健全でかつ日常的な機能があるという点を指摘しております。すなわちコミュニケーションということであります。すなわち、対象は個々人のフィーリングの具体的な何かしらを投与されるわけですが、たとえもしもそれらが有害である場合にしろ、希望的に申しまして、おそらくそうした影響を修正する能力が備わっている他者と真に分かち合われ、それでそれらは加減され緩和されたかたちで戻ってくるということがあるということなのです。

この論文において私は、この後者の投影的プロセスのタイプに限って言及してまいりつもりです。と言いますのは、Rosenfeldに拠りますと、それが愛情をコミュニケートするために使われもするということ述べているからです。すなわち、具体的に良き心的実体を対象‘へと into’押し入れるということあります。ここで私が探索しようとしておりますマザリング mothering の側面といいますのは、具体的に母親の良き‘部分 parts’が子どもの中へと押し入れられる、こうした投影的行為の類いであります。子を育まんとする母親の願いは、無意識裡に、具体的な心的実体、彼女の自己の良き部分が子どもへと浸透し、その心の内側で良きものとして空想され拡がってゆくのを経験しているものなのです。子どもはこうした伝達 transmission によって運ばれる‘こころのクオリティ’を受信する末端 end というわけではありますが、それで具体的に良き‘何もの’かが内側へと入ってきたといった空想を懐くことになるものと思われまます。

同様に、母親の嗜好やら価値観というもの、彼女の原初的な自己にとっては、必ずしも‘良き想念 good thoughts’としてあるわけではなく、彼女が子どもを‘教え導く’ときその子に与えるところの具体的な心的実体、良き‘部分 bits’として経験されているものといえましょう。言い換えれば、彼女は単に子どもを‘教え導く instruct’つもりはないのでありまして、無意識裡に想像された‘良きもの

good thing' を伝えたいからそうするといった内なる信念でもってそうするのであります。これに対して子どもがどう反応するか、それは良き 'こころのクオリティ(資質)' から発散されるところの喜びによって身も心も貫かれると感じることなのであります。この喜びといったものが子ども自身の内に於いて生き生きと活性化し、良きものそして安心 relief を広げてゆくといったふうに想われるわけです。母親の良き心的部分は、子どもの自己をその内側に於いて満ち、そして子どもはそれらをキープしておこうと決め、空想においてそれらを '自らのものとする own' ののであります。そのようにして彼自身の心の中で母親の投影と同一視するわけであります。ここから、母性的パーソナルなクオリティも、そしてまた '家族のカルチャー' を構成するところの深い無意識的的信念も、こうした原初なありようで伝えられることが見てとれましょう。

ここでもう一度改めて、「投影 projection」は具体的なかたちで転移されるものではなく、そのクオリティ quality が転移的モードにおいて伝えられるということを強調しておきたいです。このように子どもは、伝えられた母親の喜びのクオリティに対して、彼自らの内側で経験されたところの '良き対象 good object' のバージョン(新たに変容されたかたち)でもってそれと一致させて反応するのです。母親のコミュニケーションに伴うところの喜びというものは、オッパイのお乳と同じぐらい、子どもはこころ psyche を '養う' ものといえましょう。それは情動的な '良きもの' であり、子どもの空想においては、具体的な良き 'もの' となるのであり、彼の内側へと浸み込んでゆき、そうすることで母親の子どもに良き 'もの' をもたらしたいとの空想的願望の必然的結果が生じることになるわけであります。この原初的空想コミュニケーション phantasy communication の重要性は、伝えられ感じられたところのフィーリングが緩和されていない、まさにその強度にあります。それらは概念的にコンティンされたコミュニケーションではありません。それらは子どもに生々しくも極めて力に溢れた 'こころのクオリティ' を伝えることとなります。それら感じられたそのままの良き空想が子どもの心の中へと浸透してゆくと、それは具体的な、良き対象への彼の信頼を大いに募らせるといいでしょう。その強烈さは、力の漲る、'なにものか' といった幻想へと転じることとなります。それは彼の内側へと浸み込んで、あらゆる苦痛の感覚を圧倒するのであります。このようにして、それは真に '抱えるもの holding' となるわけです。それというのも、子どもは一時的にせよ、その存在を満ちたところの力溢れるこころの喜び、強烈な良き 'こころのクオリティ' に身も心も掌握されていると感じるせいなのであります。良き対象を取り込もうとする子どもの空想についてはよく耳にいたしますが、この論文で意図されておりますのは、それと同様な意味で、原初的空想が母親の中にも作用し続けているという事実を強調することであり、それこそが愛情豊かな母親のこころのクオリティが子どもへと伝えられるための媒体 medium であるということなのです。

これから2つの事例をご紹介しますが、これらの家族を巡って殊更「ポジティブな投影同一視」について論議することにあまりこだわってはいません。しかしながら、これらの例から、母親の子どもとの相互作用において、それが有ると無いとではどう違うものか、その一般的な見解が演繹されてゆくものと私は考えております。

ルーシー&ピーター

二組のご夫婦が幼い子どもを連れて私に会いにこられました。それぞれが《the Under-Fives Counselling Service》からのご紹介です。私は彼らのどちらも2学期(term)間会ったことになりまして、そのうちの1学期 term が重なっております。一つの方は‘成功例’となりました。ピーターはぐんぐんと進歩し、両親はその結果に大いに喜び、我が子とよりうまく付き合えるようになってゆきました。もう一つの方はといいますと、残念な結果に至りました。ルーシーはセッション中いくらか反応するものも、セラピの時間は両親のニーズやら葛藤で殆どが費やされてしまい、結果的に未熟なままそして破壊的な様相を呈するかたちで終わってしまいました。どちらの場合も、家族全員と会っております。ピーターの父親は1学期過ぎて以後来なくなりましたが、ピーターは母親に連れられて通い続けております。ピーターは治療当時、生後15ヶ月目になっていて、いくらか言葉を習得しておりました。ルーシーの方は16ヶ月目であり、全然言葉は話せませんでした。

これら二組のご夫婦と幼い子どもたちとご一緒に、まず私が驚きましたのは、子どもがそれぞれにひどく違うということでした。ピーターは、極度の分離不安という訴えで連れてこられました。ルーシーはといえば、‘ひどく扱いにくい’ということでした。ピーターは、彼の若い母親がちょっとでも動こうものなら、彼を置いていなくなってしまうのではないかとビクついて、恐怖でおののく表情を瞬時に顔に浮かべたのです。ルーシーは活動過多ぎみに部屋の中を駆けずり回っておりました。明らかに子どものどちらもが、両親に負けず劣らず注目を必要としていたのです。ところが彼らはいろいろな面で随分と違っておりました。ピーターは、私を与えた玩具を喜び、それを使って私とも気持ちを通わせることができました。そして2回目のセッションの後から、彼は私が彼用にと準備してあった箱の中に入れてあったぬいぐるみがとても気に入り、それを手放すことができず、それをお家へ持って帰ることが許されないと分かったとき激しく泣きました。そして翌週にセッションに戻ってきた折、彼はそれを抱きしめ、それに嬉しげにキスをしました。やさしげに語りかけながら…。明らかにそれは‘いい対象’でありました。それと同時に、彼は箱の中の他の玩具にも熱心に気持ちを向けました。彼はセッションの時間を喜んでおり、いっぱいすることがあったのです。

それとの比較でいいますと、ルーシーはセッションにいつこうに落ち着く気配は見せませんでした。彼女が玩具に最初に示した反応は、それらを部屋中に投げ散らすということでした。それらはあつという間に部屋のあちこちにばら撒かれてしまい、その光景に私は少々気分がうんざりしてしまい、まだセッションがきちんと始まってもないのに、与えてあげられるものなど何も無いのではといった気分になってしまったというわけです。彼女は家族人形を手にし、口に咥え、そしてそれらを噛んでおりました。そして部屋中を駆け回り、家具に上ろうと頻りに親に手助けをせがむのでした。それでどうにか家具に這い上がったところで彼女は直に不満足となり、それで床に滑り降り、また別の家具へと駆け寄ってゆき、同じようにそこに上りたがって手助けをせがむのでした。彼女を宥めずかすために親は哺乳瓶を持参しておりました。それが与えられると、彼女はしばらくの間静かになってミルクを吸っております。だがそれから突然その乳首を齧って哺乳瓶から外してしまうのでした。それでビシャッと床に落ちてしまい、しばしば

ミルクをわれわれの方にも撒き散らす結果となります。最初のところ、意味のある遊戯といったものは殆ど皆無でしたし、彼女に接触を求めようとするこちらの努力の後ですらも、それはほんの散発的にしか見られなかったといえましょう。

これら二組の家族と面接しながら、私はしばしばこうした違いが一体どこから来るものやらと考え込んでしまったのであります。それで私はどちらの子どもも「コンティンする環境 containing environment」が欠如しているということに気づきました。それもかなり違った意味で・・・ルーシーの両親は、彼女の圧倒的な攻撃性を止めることが出来ないように見受けられました。制限を加えるということがまるで出来ないのです。そして徐々に明らかになったことは、ルーシーには制限を受け入れる内なる動機づけ incentive がまるでないということでした。それでその結果、コンティンしようとするいかなる試みに遭遇しても、それはもう果てしない格闘 battle になってしまうというわけでありました。彼女の攻撃性を止めようと両親が試みても、一時的に効果があったとしても、それは長くは続きません。単純に彼女にとっては何ら意味を成していなかったからです。制限を加えようと親達が見望むことは、彼女にとってまるで理解されておらず、それらは実際のところ彼女のこころ psyche に全然‘浸透 penetrated’してゆかないのです。ルーシーのこころの状態は、そのまま親たちが深刻な結婚問題 marital problems を抱えていて、また彼らがそうした関係性のモデルを子どもへとそっくりそのまま感染させてしまっている事実を反映しております。すなわち、己れの良きフィーリング・良き部分 parts を他者へと投影することはありませんし、相互に同一化し、共感しあうといった実質的な能力は彼らの中に皆無ともいえたのです。

ピーターの母親は、完全に彼の攻撃的なフィーリングを否認しておりました。その結果、彼は母親に対して抱くところの普通の子どものらしい敵意を彼一人で対処せざるを得なかったわけです。それは分裂し、彼の環境の中の他の誰彼へと投影され、その揚げ句、母親以外の誰に対しても恐怖症的な反応をしたというわけでありました。従って、母親からの分離はピーターにとっては破滅的ともいべき大惨事なのです。なぜなら彼は、実際の母親の眼前では思いも寄らない迫害的な‘魔女’的母親と一緒に取り残されてしまうといったわけだからです。彼女は、頑なに彼の自分に対して抱くアンビヴァレンスの可能性を無視しておりました。恰も彼女はただ良きものでしかないというわけでありました。彼女自らの攻撃性への恐怖は明らかに同じく抑圧されており、彼女のフィーリングはいつもただ良きものとしてしかないといったふう子どもには振舞っていたこととなります。この相互作用のパターンは彼女の夫へにも波及されており、結婚は一見満足的であるようですが、互いに論議を戦わすといった余裕はどうやら無く、何やら刺戟に欠けているように覗われます。

どちらの父親も父親としては‘ほど良い good enough’方たちに私には思われました。例えば、彼らはどちらも子育てにそこそこ関わって手を貸しておりましたし、どちらも面倒がらずに子どもを外へ連れ出すこともしております。そして、いずれの母親も妊娠と出産については特に目立った困難はなかったと語っております。

子どもが問題を呈しているとしても、ピーターの事例が示すように、そこには複雑な要因が絡んでいるということはなかなか判明し難いのでありますが、その一方で子どもの問題というよりもむしろ事の深刻さがその子全体のあちこちに広く浸透しているといった場合があります。ルーシーの事例がそうであります。生得的な要因がいくらか問題でありましょうが、どうやら両親の関係性が決定的な要因として挙げられます。しかしながら、まずここで、ルーシーの母親にまったく欠如していると思ふ外ない或る要因に限定し、それがどのように徐々に私の注意を引くに至ったのかを語ってまいりたいと思います。

ルーシー

ルーシーの両親は晩婚でありました。‘滑り込みセーフみたいな・・・’と、ルーシーの母親は語っております。その理由というのはどちらもが独身であることに満足しており、殊更結婚願望を抱いていなかったからなのです。私のところに来所した当初から、彼ら夫婦間には緊張感がかなり明瞭に覗われました。そうでありましたから、ルーシーはわれわれの会話からつい‘はぐれてしまう’ことがあったのです。彼らはどちらも独り身でも‘大丈夫’だと思っていたわけですから、それで結構な年になっていざ家族としての生活に適応しなくてはならない段になると、それがストレスであったということになります。彼らは、結婚とは不毛で無意味だという一般的見解を表明しました。そこで私が彼らにどのように出会ったのかと聞きますと、それはもう単純に偶然の一致だったようであります。彼らは、それぞれ或る時点で腰を据えて家庭を持つことを考え出したということを低い声でぶつぶつ呟きました。私は彼らに互いに惹かれ合ったのかと尋ねます。ルーシーの母親はそうしたことは考えてもみなかったし、家庭生活をするには互いが惹かれ合っているかどうかは問題ではないと思ったようであります。ルーシーの父親はちょっと気後れしたふうな表情になり、<それは興味深い質問ですね>と素っ気なく返答します。それから彼は、<妻を愛している。でも、それが‘一目惚れ’といった類いのものだったかは分かりませんが・・・>と付け加えます。彼らはどちらにしてもその性格からしてロマンティックではないという点で同意しました。しかしながら、どう見ても物事がうまくいっていないようですし、彼らは今や身動きが付かない状況にあるのではないかと私は指摘します。すると、父親はくまあ、実際のところ、そういうことになりませんか。それでどんな助言をいただけるんですか？>と私に訊き返します。

それに対してどう反応すべきかとあれこれ考えめぐりながら、突然私はなんとも気が萎えるような無力感に襲われてしまったのです。私はごく単純に、彼らが夫婦であり続けるかどうかなど全然どうでもよくて、まるで関心を抱くことができないといったふうに内心感じたわけです。それでその揚げ句、居心地の悪さと罪悪感へと導かれ、私は躍起になって彼らの窮地を打開すべく懸命に頭を働かせたという次第でした。私はこころの内側で、自分がなぜにもこれ程この人たちから相談を受けるのに気が乗らないのかと訝しく思いながらも、この部屋にいる誰一人として、もしくはこの世の誰もが彼らが一緒に暮らし続けるかどうかなどまるで気にも留めないといったことを考え、ひどく打ちのめされた気分になったのです。この後もこのようなフィーリングは引き続き数週間ほど持続しました。それもまったくのところもっとひどくなる一方でありました。そこで徐々に私の気掛かり distress を言葉にして語ってまいりました。彼らのいずれもがこの事態に対して悲しいと感じてはいないみたいだということを指摘し、重要な何かが見失われ

ているように思われると付け加えたのです。彼らの私との関係性においても、それから彼らの家庭生活においても・・・であります。それは、一緒にいてお互い同士気にし合うとか、言葉を交えて互いのために話し合ったりするといった事柄であります・・・。

ここで彼らが示した反応には些かびっくりさせられましたが、それでいろいろと明らかになっていったのであります。彼らはどちらも動揺を隠せないふうでしたが、まず父親が口を開き、<あなたのおっしゃることは正しい>と言いました。それから彼らは自らの背景について語り始めたこととなります。ここで取り分け目立って驚いたことの一つは、母親は幼少期に家族の誰にとっても‘誰でもないひと nobody’であったと語った際の彼女の気持ちであります。彼女の母親は6人の子どもたちがいて、どの子も皆てんでに混乱を極めた家庭内にたむろしており、そこでは父親は何年もの間母親に無視され、情緒的には放っておかれたままで、ついには彼女の許を去ったとのことでした。5人の他の同胞の中で4人が離婚をしており、もう一人は全然誰とも安定した関係を築くに至らず、結婚に至っておりません。そして誰もが定職を持たず、実に混乱を極めたライフスタイルで過ごしているようであります。彼らは、互いに滅多なことでは連絡し合うこともなく、大概のところどこに住んでいるやらも彼女は知らないといったふうでありました。ルーシーの母親は4番目の子どもです。私が、児童期において彼女が誰の心にも居ない、とくに母親の心の中に居ないと感じていたということをコメントしますと、彼女は明らかに動揺し、子ども時代の経験はまるっきり唯もう‘無意味 pointless’と感じていたということを私に語りました。彼女は母親を、子沢山で、しかも本当に欲しくも必要ともしないのに産んだことを苦々しく心の内で詰っていたのであります。私は、ルーシーの母親が現在の状況においてこの家族生活の‘パターン’を反復していることに強く印象づけられました。そこでは家族の誰もがてんでにばらばらで、意味のある群れとして相互に働きかけ合うといったことがないこととなります。彼女は、自らの母親が子どもたちに何ら‘目的意識 a sense of purpose’を伝えてくれなかったことを内心咎めているのです。つまりはそんな具合にどの子も母親に欲しがられていないと感じさせられたわけですから・・・。彼女がそれからさらに語ったところから、‘相互に恩恵を与え合う投影的行為 (mutual beneficial projective activity)’がこの家族にはほとんど垣間見られないといった感じを私は抱いたのです。つまり家族同士が互いに同一視することもなく、したがって結合力のある人間関係を成していないといったわけであります。

これらをルーシーへの彼女の態度にリンクを試みますと、さらに興味深いものがあります。ルーシーという存在は同じく彼女の眼には‘目的がない aimless’といったふうを感じるということ、彼女は認めました。ほんとうのところ子どもは要らないということをも告白します。別にルーシーがいてもいいのだけれども、でも実際のところ彼女が誕生したときには子どもを欲しいって思ったわけではなかったとのこと。妊娠中、彼女は何ごととも起きてはいないかのように振舞っていましたし、赤ちゃんの訪れを期待して待つといったことはまるで念頭になかったとのこと。いつも彼女は赤ちゃんの世話は必要とあらば何でもしたわけですが、彼女にしてみれば何故それをするのか、もしくは赤ちゃんというのが一体全体どういう意味があるのかなど、まるで皆目分からないといったふうだったのです。彼女は罪悪感を抱きました。なぜなら心底こんなふうを感じるつもりではなかったからです。それと同時に、彼女はどうしたら自分が

違ったふうに感じられるか見当も付かないのであります。ルーシーを眺めながら、おそらく気が滅入っているに違いなからうと思ってみたりもします。またルーシーがひとりぼっちで大きくなり、親しい友人を持つこともないのでと心を悩ますのです。なぜ彼女はそう思うのか、そうした悩みをうまく説明できませんでしたが、ルーシーの友だちになれないでいるのは彼女自身であって、そのせいでルーシーをひとりぼっちにさせているのではないかという私の解釈をどうにか彼女は受け入れたのであります。

こうした抑うつ感ならびに子どもへのアンビヴァレンスの類いはルーシーの母親にとって日常的なことであったようです。そこからどういことが起きているのか、大概のことはこれまでに触れてまいりましたが、ここで殊更私は或る点に注目したいと思います。それはすなわち、彼女が子どもに対して‘恩恵的な投影同一視を beneficial projective identification’を活用できないということであります。その結果として、いかなる目的性もなく、もしくは恩恵的な何かといったものがまるで空っぽな‘こころのクオリティ’をルーシーに伝えているにすぎないわけであります。ルーシーは母親から積極的な意味での敵意を受け取っているわけではありません。でも、いかなる意味でも母親の喜び maternal pleasure の感覚を受け取っているとは言えません。同じように、このご夫婦は私の中に積極的な情緒的反応を呼び起こすことはなかったわけです。私は、どんなに彼らに良き希望のある考えを伝えたいと思おうとしても困難でしたし、そして間もなく如何なる良きものを彼らの心に与えるなどとも無理だと悟ったのであります。

こうした具体的に経験される良きものの不在ということは、そこに‘死んでいる dead’クオリティがあると言わねばなりません。従ってそれは、私の心の内では攻撃性とリンクされ、ルーシーの母親は彼女自身の母親に向けた憎悪の感情に対処しきれなかったのでなからうかと考えたわけです。そしてたぶん憎悪は、彼女の娘の赤ちゃんへと向けられたのであります。そうした対象としての赤ちゃんのルーシーは、彼女の憎悪された母親・対象と、そして又、かつて彼女がそうであったような誰にも欲される事などあり得ない、つまり‘何ものでもない nothing’といった特徴をその身に引き受けてしまったということになります。このように娘へと向けられた憎悪のこもったフィーリングをめぐる不安感がゆえに、彼女の心は閉じられてしまったことになりましょう。ルーシーを憎悪の孕む投影から護らねばなりませんから、そこで母親はあらゆる投影を断念するに至ったのに違いありません。下記に綴りましたエピソードは、ごく最初の頃のセッションであります。母親のルーシーへの憎悪、それにその結果としての子どもへの良き投影といったものが欠如しているといった問題性を例証しているものと考えられます。

私が待合室に彼らを出迎えにまいりますと、ルーシーはそこら中を駆け回っておりました。両親は、ただジッと前方に目を据えて虚ろな感じで椅子に腰掛けており、ルーシーは完全に無視されておりました。それから彼らは、身を振って抵抗しているルーシーを腕に抱えて運びます。私の診察室に入るや彼女はまたもや駆け回り、時折家具にからだをぶついたりします。両親はソファーに座り、それから父親が玩具の箱に取り出し、その中に私が用意してあったぬいぐるみ(犬)を手にして<ルーシー、ほら、見てご覧。可愛い犬ちゃんがいるよ>と語りかけました。ルーシーは物憂げに父親に近寄ります。そのぬいぐるみの犬を無関心な態度ながらも一応眺めやります。恰もそれは何ら意味のない

‘モノ’でしかないといった感じでした。それから彼女はそれを父親から奪い取り、部屋の隅へとビュンと思いつり投げ飛ばします。父親はそれにはちょっと抵抗を示し、拾おうと立ち上がりかかったときに、今度はルーシーが他の玩具を掴み取り、部屋中にそれらを撒き散らしました。それらの玩具の幾つかは掴まれたと思う間もなしに彼女の手からこぼれ落ちてしまいます。それはまるでちゃんと握ったり放り投げたりするに値しないとでもいった感じでありました。そのいかにもこれ見よがしの無益・無用といった玩具の取り扱いに私は驚きを隠せませんでした。玩具の或るものはビュンと高く放り投げられ、その一つは危うく母親にぶつかりそうになりました。彼女はくもう止めなさい・・・>と抵抗を示します。父親はもうすっかりうんざりした感じに見えました。ルーシーから玩具箱を取りあげ、散らかった玩具を拾い集めます。ルーシーはまた部屋のなかを駆け回ります。母親は彼女を抱き上げ、膝の上に落ち着かせようとします。<どうしたっていうわけ？>と彼女に語りかけながら・・・ルーシーは彼女の膝の上で身を振ります。それで母親もついに諦めて彼女を床へと下ろします。彼女はすぐさま駆け回り始めます。母親の気持ちは子どもに寄り添っているとはまるで言えません。どこか心ここにあらずといった感じでした。それから、<いずれルーシーは落ち着くでしょうから、われわれはとにかく‘始めなきゃ’・・・>といったことを言います。父親はとても言いにくそうに、<心のうちにいっぱい考えることがあって・・・。それでここに来ると、あまりにも多くのことが頭にもたげてくるのでとても話し合うことが出来そうにありません。それで気持ちが落ち着かないんです・・・>と語ります。週一回ここに訪れることではどうも十分ではなさそうであり、またルーシーの振るまいが事態をいっそう落ち着かないものになっていることでした。確かに私にしてみても、どうにもルーシーによって妨害され、問題に取り組むどころではなかったのです。彼女は今やどうにも扱いようの無い状態になっていました。メタルロッカーの押入れを大きな音を出して叩いたり、玩具をあちこちに投げ飛ばすやら、家具の上に這い上がろうとしたり、勝ち誇ったふうに高笑いをしたり・・・。そうした騒音はまったくのところ耐え難いものでした。

しかしながら、心がひどく苛立つ代わり、私は突如としてひどく落ち込んでしまったのであります。私の強く印象づけられたことは、単純にルーシーにとってはここが嫌なのだということでした。私は、両親のどちらかがしっかりと彼女と視線を合わせることを全然してないということに気づきました。そういえば思い出したのは、過去2回のセッションとも、その殆どの時間を両親の問題で占められてしまい、ルーシーの出番はなかったということで、それが気掛かりでもありました。そこで私は、彼女に対して私とのコンタクトを促すようにと試みようと思えます。私はまずは椅子に座ったままでしばらく彼女の方に目を遣りました。ひどい騒音の真っ只中で彼女に話し掛けたり、彼女を部屋中追掛けるといったことは実際的ではありませんでしたから。私は彼女を観察し続けます。そして可能な限り彼女とのアイ・コンタクトの機会を逃すまいと努めました。ごく直にルーシーは、私が彼女をジッと見つめていることに気づき、動きが緩慢となり、そしてそれからだんだん私の方に目を遣ることが多くなりました。やがて彼女は私の目の前で立ち止まり、ただじっと私の目を覗き込んだのです。個人的に申せば、私はこれには大いに喜んだわけであります。少なくとも彼女に何か言ってあげられるチャンスになったからです。そして彼女に語りかけられるごく簡潔なことばを心の内で探しておりました。<たぶん今日も無視されているといったふう感じていて、だから気にかけてもらえるようにしなきゃって思ったのね・・・

>といった類いのことです。これらの考えが私の心の中に行き交っているとき、私は椅子に前にめり込むように座っており、彼女の方へと屈んで、話そうとする体勢でいることを強く意識しておりました。

ところがちょうどその時、ルーシーの母親が遮りました。明らかに居心地の悪い感じで、<この子は誰にもそんなふうに見詰められるのは好きじゃないんですよ。彼女は恥ずかしがりや shy なものですよから・・>と言います。しかしながら、ルーシーは全然恥ずかしがっているふうには見えません。それどころか、いかにも注意を払っているふうに、尚もじっと私に見入っていたのです。母親はだんだん気分が穏やかではなくなり、ルーシーをそんなふうに見るのは止めてくださいと私に頼み込みます。彼女を怖がらせるからというわけです。彼女自身がとても不安げに聞きました。突如としてルーシーはぬいぐるみの犬を拾い上げ、それを抱き上げてその顔に見入ります。殊更その‘目’であります(2つの丸いビーズなのですが・・)。彼女はゆっくりとそれらの眼を一つずつ指で指し示しながら、触れてゆきます。それから彼女は私の方へと向き直り、私の目を考え深そうな顔付きで見遣って、それから親指を口の中に咥えたのであります。

私はここでようやく彼女に何かを語ってあげられると感じ、そこで<私の眼もそうなんだけど、見える眼が2つあるってことを示してくれたのね。それに今やルーシーの内側にもいい眼を2つ持っているって思えたわけなのね>と彼女に語ったのです。ルーシーは小さく溜め息をつき、床に座り、そして治療が始まって以来初めて遊びらしい遊びを開始したのでした。彼女は母親の人形を子どもの人形の隣に並べて手にして、なにやらを彼女らに‘説明して’いるかのようでありました(喃語で、彼女はまだ話すことは覚えておりません)。彼女はそれからお茶のポットを手にして、その注ぎ口に口をつけ、貪欲に、攻撃的なマナーで飲み干します。まるで最後の一滴すらも飲み干そうとするように頭を後ろへとのけぞらせたのです。この間に私は、母親になぜ私の凝視がそんなに怖いと感じたのか、母親と一緒にいろいろ話し合うことを致しました。ルーシーは15分ほど静かになって遊んでおりました。それから直にまた彼女は駆け回ることを始めたのですが・・。

ここでは、「恩恵的な母親の投影 beneficial maternal projections」がなぜ不可能なのか、そしてそのルーシーに及ぼす影響といったダイナミクスに限定して語ろうと思います。まず最初に、母親は私がルーシーを見つめていることを迫害的な行為と見做しました。彼女は明らかに私の凝視でもって何かしら悪いものがルーシーの中へと侵入されるのを恐れたのであります。ルーシーは恥ずかしがりやでもなく、私の目を怖がっているとも思えませんでしたから、母親が彼女自身の否認しているところの攻撃性を私に投影したものと考えられます。だからこそ私は、ルーシーとのコンタクトにおいて敵対的であると見做されたというわけであります。言うなれば、私は母親の敵対的な側面を表していたわけです。この敵意・憎悪は、彼女のルーシーに対する無頓着 apathy、そしてその結果として彼女が彼女自身の愛情やら良きものを投影する対象として我が娘を活用し得ないといった能力の欠如に関連していると思われます。たぶん彼女は、彼女自らが有する愛情そして良きものの価値を疑っているのです。

彼女自らが経験した児童期の‘剥奪 deprivation’がために、具体的な経験される良き、愛情ある心の部分が奪われたままなのでしょう。そうでありますから、我が子に対して「内なる良きもの inner goodness」を示したり、認めたりすることへの動機づけが彼女にはほとんど無いのです。このようにルーシーに対する自己愛的なニーズが欠乏していることは、さらには子どもと一緒にいて寄り添ってあげることが取るに足らないものといった彼女のフィーリングをさらに募らせていったものと覗われます。

さて、ルーシーはといいますと、彼女は見つめられることに安堵でもって反応しております、彼女は溜め息をつき、そして座って遊び始めたわけですから。しかしながら、この良き経験はすぐさま貪欲さを引き起こしました。彼女はポットの注ぎ口から直接にすべてありったけ‘飲み干そう’としたのです。このように私のまなざしが彼女に‘注ぎ込んだ’良きものが、おそらく私が内側にもっと抱えているはずの別の良いものを彼女はさらに取り込もうとしたことがここに示されております。彼女は直接ポットの注ぎ口へと向かい、それでもって羨望的というか、ポットが家族全員に飲み物を注ぐものであるのを敢えて無視したわけです。しかしながら、この貪欲さすらも、以前の大掛かりな破壊的行為よりもまだましであり、進歩と言ってもいいでしょう。たとえ貪欲的であったとしても、ルーシーは少なくとも良き対象に関係づけていたからです。こうした状況において、彼女の貪欲さ greed と万能感 omnipotence を理解することは容易であります。彼女はあまりにも貰いが少ないのです。だからいざ貰う段になると僅かすぎて過剰に興奮をそそり、だからいっそう対処がし難くなるといったことなのでしょう。

次にここで私は、このセッション中の私自身の心の状態を再吟味したいと思います。何故にルーシーは私の向けるまなざしに反応したのでしょうか？私は、何らかの言語的なレスポンスを思いつく以前に、かなりの時間ただ椅子の縁に腰掛けて私の心の中であれこれと思いを巡らしつつ彼女の気持ちに通じさせようとしておりました。この際の私自身のフィーリングというのは、‘想像’の中であつたにしても、私の注目 attention を彼女のころへと‘投げ込む’といったふうでありました。この注目は決して敵意あるものではなく、希望的なものといえましょう。私としては、彼女がここに居ることには目的があるということ、そしてちゃんと氣遣われているということをどうにか伝えたい、そうした思いでおりました。そこから何かしら彼女の感覚が掴み取ったものがあるとすれば、それは良きもの(注目、コンタクト)を彼女の中へ与えんとする意図といった‘ころのクオリティ’でしょう。さらには、過去2回のセッションにおいて彼女を十分顧みてあげられなかった[無視した]といった私側の罪悪感もありましたので、それで修復的な投影 a reparative projection を帯びて、彼女の混沌を極めた状態をいくらかましなものにしようとの意図があつたことにもなりましょう。ルーシーは私の眼を見る前に「ぬいぐるみの犬」の眼を指し示し、それらに触れたわけですが、ここにいかに私の注目が、そして私の‘見る眼 looking eyes’が具体的な良き実体として経験されたかということが示されているように思われます。

最後に付け加えますと、両親側の規律(躰け)の問題がありましょう。ルーシーの振る舞いに制約を与えるような適切な行動を起こさず、両親のどちらもが実際のところ情動的な注目もしくは情動的な要求をルーシーに投影することに氣後れしてしまっております。彼女は、母性的愛といった‘ころのク

オリティ'も父性的な厳格さといった'こころのクオリティ'をも経験し得ないままであります。ルーシーは、愛情やら厳格さといった具体的に想像された実体に対応し得ないのであり、従って両親の行為はまるで無益であります。そうでありますから、彼女にしてみても、その内側において秩序 order をもたらすことのできる心的要素 psychic elements をコンティンしているといったふうには一向に感じられておりません。これまでも述べましたように、概して投影された'こころのクオリティ'とはパワフルなものであり激しいものなのです。この事例における両親のコミュニケーションにはそれが欠落しており、そのせいで彼らに何を言われようともルーシーには非現実的 unreal なものとしか聞えてこないのです。彼女には彼らが何を欲しているか分っております。しかしながら、彼らの意図に本来付与されていなくてはならない'情緒的クオリティ emotional quality'がルーシーには経験されておられません。それがため、両親の要求が訴える内容がごく希薄となり、ルーシーの心にはまるで届かないわけです。ですから、それが彼女の側において現実であったり具体的であったりすることはあり得ないといったこととなります。

ピーター

ピーターの家族歴はかなり違います。両親は幸せな結婚をしており、常に家族生活そして子どもを持つことに憧れを抱いていたのであります。母親は妻であり母親であることに満足を感じておられますし、確かに自己充実しているといった印象を醸し出しておられます。それが事実その通りであるという一方で、しかしながら彼女の態度にはいくらか防衛的な要素がなくありません。例えば、彼女は家族生活を基本的に'仲良し chummy'の経験として思い描いているふうでした。つまり家族成員それぞれが、まるで学生がフラットを共有しているみたいに聞こえなくもないのであります。こうした様相は、母親であることが実際のところもっと日常的に'てんやわんや'だったり、情緒的にも大いに厄介でわずらわしいといった側面がどうやら度外視されているといったふうに思われ、私としては幾らか気になったのです。彼女はこうした点を頑なに無視しており、そしてその結果、ピーターの'敵意ある投影'に対して受容的にはなれないのであります。そこでは、ピーターに対する愛情は真実そのとおり経験されているわけですが、それが関係性におけるありとあらゆる攻撃的要素の防衛的に'分裂した'ものと一緒くたになっているといった、ちょっと興味深い印象を抱いたわけです。しかしながら、このように感情が入り混じることは、彼女にしてみればどこにでもありがちな、ごく日常的な瑣末でくだらないものといったふうで、敢えて取り沙汰されることはなさそうであります。

ごく最初から母親の意図的なコミュニケーションはかなり明瞭といえます。彼女はピーターに恰も大人同士が会話するように話し掛け、彼の年齢などまるで考慮することなどありません。例えば彼女は、説明するよりもむしろ物事をそのままに叙述するだけであります。彼女は、恰も大人を相手にしているように、子どもと相対する上で慎み深かったともいえましょう。彼に対する態度は一事が万事そのようでありました。彼の'子どもっぽさ childishness'は否定され、無視されていたわけです。その一方で、彼女は彼に熱心に興味を持って臨みまし、しばしば目と目のコンタクトを致しますし、彼の反応にはとても意欲的に心を傾けました。さて、下記にご紹介するのはセッションの記録の抜粋であります。それはたまたま父親が同席しなくなってからの最初のセッションであります。

彼らは時間通りに訪れ、一緒にソファに落ち着きました。ピーターは私をちょっと怯えたふうに見上げます。たまたまここで母親が車の鍵を床に落としてしまいます。彼らはどちらもそれに目を遣りました。すると母親が「ほんとに申し訳ないのですけれど、鍵を私のバックにしまったださるかしら？」と言います。一瞬私はエッと思います。彼女は私に言っているといったふうに誤解したせいですが、それはそうではなかったみたいです。ピーターは座ったまま床へと手を伸ばし、その鍵を彼女のバックに移します。それから彼は玩具箱の方へと歩み寄り、その中を覗きこみ、私の方をチラッと見ます。私はオモチャを取り出したいと思ったのかしらと彼に言います。それで彼は喜んだふうでした。早速ぬいぐるみの犬を手にし、その顔の真ん中に触って、やさしげに何やら囁きながら、「挨拶」をしたのです。それから彼は「おばあちゃん人形」を取り出し、それを母親に手渡します。その一方で、彼女はピーターが彼女から分離できるようになってきて、随分と「ましになってきた」ことを語っておりました。それで古くからの友だちにも連絡が出来るようになったということでした。ピーターのお蔭でここしばらく訪問を控えてもらっていたんだとか。彼女は、ここずっとこの一週間はとても希望が持てるように感じられ、気分が晴れたことを語ります。そしてピーターが彼女に人形を手渡したとき、彼女はそれを受け取り、とても興味ありげに見ておりましたが、突然「ピーター、ご覧なさい。ほらね、小さなブローチが付いてるわよ」と言います。ピーターが母親の方へと近付くと、彼女はブローチを指し示しながら、「<どうしてかしら。私、おばあちゃまのブローチを思い出したのよ>と付け加えます。彼はそれを見ておりました。それから私の方を見て、「おばあちゃまがブローチを付けてる・・・」と言い、そして彼は自分のシャツのカラーを指差します。母親は笑い、彼が私におばあちゃまがどこにブローチを付けていたのかを示して見せたのだと説明します。彼女はとても興味を抱いたふうに見ておられます。まるで小さな女の子みたいに熱心に・・・そして思わず手にしたそれを自分の眼に近付け、ピーターの眼から遠ざけてしまいます。彼女は彼に、「実にきめ細かい細工が施してあるようね」と言います。彼は爪先立って背伸びをし、明らかにもう一度その人形をよく見ようとして、ちょっとフツと唸り声を上げます。すると母親は「あらまあ、どうもゴメンなさいね」と言い、彼に改めてその人形を見せようと彼の目の前へと下げます。彼らは互いに笑みを交わしております。それから彼はテーブルへと向かってゆき、お茶のポットとカップを2つ取り出します。それから母親へと歩み寄り、カップを一つ差出し、「飲んで・・・」と言います。私はこの間、「変化」を経験するということがどんなふうに感じられるものかということかを語っておりました。それはピーターの変化であり、また母親のフィーリングの変化といったどちらについてもですが・・・。そうした変化は良い変化と言えますが、幾らかなりとも悲しくもあるといえましょう。例えば、父親はもはやセッションに同席しないということになっていましたわけで、それでピーターは何かしら感じるものがあり、それでママを自分が代わりにお世話しているつもりなのかと私はふと思ったりしたのです。彼はカップを耳へと近付け、それが電話の受話器であるといったふうに装い、「<ハロー、お父さん？>と言います。

ここでもう一度、取り上げるべきたくさんテーマがありましようが、取り分け母親の息子へのコミュニケーションのありようについて、そして彼女が彼についてどのような想いを懐いているのかに注目してみた

と思います。彼女のコミュニケーションは、ある意味ひどく大人びたふうで私を驚かせました。彼女はとても早口でいかにも確信ありげに話します。子どもだからワカラナイといったふうなことはあり得ないみたいですし、また大人の考えるみたいには考えはしないなどあり得ないといったふうで…。ある意味ピーターは、ずっと年下の誰かというよりも、対等の仲間として相対されております。私の中で徐々に募っていった印象というのは、彼女のコミュニケーションの有りようは過剰な投影同一視に起因するものであり、それ故にピーターは、彼女とは別もので、それも全然成熟していない存在などではなく、彼女自身の或る側面として遇されているということでもあります。彼はどうやらポジティブな投影を引き受けているように覗われました。それも彼が彼女自身のポジティブな側面において同等と見做される限りにおいてなのですが…。ある意味、彼女自らの投影されることの良きものが彼に反映されていると見做されていて、そのお蔭で彼はどうやら愛されているといえそうです。これは彼の敵意について頑なに察知しようと敢えてしないことにも結びつくわけです。従って、彼の彼女に対するより自立的かつ批判的な態度は彼には危険と察しられ、そして大概のところ彼は母親の投影された良きものと己れ自身とを同一視〔重ねる〕ことでしか愛されないものと感じてるふうなものでした。

こうした事柄を申し上げました上でさらに指摘されますことは、母親がピーターに対してフィーリングを真の喜びをもって伝えられているということとして、またピーターにしても対象の‘良きもの’に大いに喜びを感じております。それらは疑いようもありません。例えば、彼女はこのセッション中にそうした喜びのフィーリングを私に伝えております。人形が身に付けていたブローチは、彼女の母親との連想からして、それが良き‘オッパイ’を象徴していたように私には感じられました。それは、おそらくピーターが以前よりもずっと良くなったというお蔭もあり、セッション中において転移上私が彼女にとって良き対象をなっていたことを表象しているとも言えましょう。彼女にはこの良き対象を息子と共有することには何ら問題はありません。そして彼の方もまたその結果としてお茶を彼女とともにするというのを欲したことになります。彼女の想いにおいて、息子の進歩といった具体的に経験された喜びを彼に十分に伝えておりますし、彼の方にしても彼女の希望に満ちた良きムードといった‘こころのクオリティ’をしっかりと掴み取っております。彼は良き‘ブローチ/乳房’によって抱かれたように感じ、それで母親にその内容物（つまり、お茶）を与えんとしたものと思われれます。

ここで何故にピーターはルーシーよりも接近可能であったのかを理解するためにも、この母親の息子との間の相互作用のポジティブな側面を、それに微妙に絡み合っているところのより病理的な側面から切り離して考える必要があります。躰けという点では、この母親は息子に厳格さを投影させることが同じようにできております。それで彼は、彼女の言うとおりに床に落ちた鍵を彼女のバックの中へとしまっただけということになります。これは単に‘操り人形’のような従順さとはいえません。ピーターには十分意味的に了解できたわけですし、むしろ彼が参加すべき家族のカルチャーの背景と断言していいでしょう。母親は、彼が意味ある家庭生活の掛け替えの無い部分であって欲しいと期待しております。そのように彼自ら家庭の一員として参加することははっきりとした目的のあるものと見做されていますし、また彼女の想いにおいてこの家族が擁護するカルチャーなるものの要求を投影させ、その‘目的意識

sense of purpose' を彼に伝えてもいるわけです。ピーターは、こうした強いられるものは、きちんとした目的があるといった '心のクオリティ' を把握しております。それは或る種、熱意 enthusiasm とも言うべきものでして、それが彼自身の内側で熱心な動機づけとして経験されていることになりましょう。それゆえに彼自身の努力することへ向けての発奮やら、彼の早熟な言語的習得も又そのようなものとして見做してよかろうかと思われます。

検討課題

これらの観察をあれこれ検討しながら、私はどちらの母親と子どもにも、そしてまた家族全員それぞれの間にも、おそらくは十分な 'ポジティブな投影的コンタクト positive projective contact' が欠如しているといった含みを幾つか示唆したいと思います。

このまま介入されずにゆきますならば、ルーシーのような子どもは年齢を重ねるに従い、ますます行為化 acting out に身を委ねることになりそうです。彼女には心のクオリティが投影されるような '良きもの' を経験することなどごく僅かといえましよう。そうでありますから、彼女が内なる混沌に対峙しようとしていかにあがこうにも、どんな援助的介入も役には立ちません。彼女の破壊性は尚のこと現実 real なのであります。なぜなら母親の愛情そして良きものは十分に具体的でもなく、彼女の心の中で堅固でもないからです。彼女は良き '心のクオリティ' にまさに '飢えている' と感じております。そしてこれには彼女の '内なる良き対象' が損なわれずに保持されるための能力が意味的に含まれているわけですが、両親が過剰に引きこもっている間は、この対象は極めて脆弱で、かつ非現実的のままである外ありません。母親からの良き投影をもたらすコンタクトによって絶えず支援され増強されることがないからであります。そうしたコンタクトとは本来、早期の授乳関係において感じさせられたところの '心のクオリティ' といった 'フィーリングの記憶 memory of feeling' (クライン、1946) を蘇らせ、従って、彼女の中に早期の乳房との良き経験の '質的な特徴 qualitative features'、またそうした '思い feel' を、さらにその原初的良き対象を保ち続ける手段となるはずのものなのです。

こうしたことがうまく行かないとしたら、ルーシーの内的な良き対象は色褪せたものとなり、彼女の中に深刻な不安感を惹き起こすことになりましょう。他の誰にとってもそうなのですが、こうした対象は、心的なさまざまなものが群れて集まって、緊密で纏まりのある良き自己を形成してゆく上での中核 (the core) となるものであります。この中核がなければ、彼女はバラバラに崩壊してしまうといった危険性を察知し、それでセッションの中で私がたまたま見かけたようにただ無目的に駆け回るといった類いの行為化で反応してしまうのです。さらに付け加えますと、ルーシーは母親からとても否定的 (ネガティブ) な '心のクオリティ' をもらってしまっております。そしてそれは、私が母親との間で感じたところの逆転移から判断しましても、死んだ感情、すなわち生きようと努力するのを弱体化させるような無関心 indifference といった性質を有しているかのように見受けられます。

両親に共通しているルーシーへの心理的な無関心から見て、ポジティブもしくは積極的な投影は彼女の心に届くことは滅多になく、影響をもたらすこともなさそうです。この家族にカルチャーと呼べるものがあるとすれば、引きこもり withdrawal と断片化 fragmentation であります。私の感じでは、これらのコンビネーションからして、ルーシーはいずれ‘マインドレス mindless な粗暴さ’へと身を任す外なさそうに思われるのです。良きもの the good が、弱々しい心的実体であり、想像上にしろ暴力に取って換わられるものでしかない場合には、倒錯とサディズムは容易に増殖されてまいります。ポジティブな母性的フィーリングが繰り返し‘介入’されることのない場合、子どもはそうした選択肢に身を委ねざるを得ません。

これとの比較において、ピーターのような子どもは、もしも介入[もしくは調停]が不在な場合ですと、或る意味、「分析の寝椅子」に座るべき候補者になりかねないとも考えられます。母親が彼に与えるところの良きもの goodness は、彼女が無視するところの悪なるもの badness をさらに耐えられないものにするでしょうから。そうしますと、この悪なるものは心の内でかなりの比重を占め、彼を内側から迫害するものと想定されましょう。しかしながら、母親がピーターに伝えたところの‘心のクオリティ’は、想像レベルにおいて彼の中で具体的に良き実体として経験されております。これがさらに繰り返されれば、これら良きものたちを‘摂り入れ同一視 introjective identification’し、それが彼自らの所有となることは大いにあり得ましょう。それらは自己のうちにおいて‘耐える存在 enduring presence’として留まり、そして内的に‘現実 real’と感じられ、したがって暴力を抑制するところの誘因となるわけであります。従いまして、ピーターの場合には、己れのこころ mind の内にポジティブな心的影響が浸透してゆく余地は大にあるものと思われまふ。

従いまして、良き母性的な対応(マザリング)とは、それはまた親的な対応 parenting とも言うていいでしょうが、子どもからの投影を受容しかつコンティンする能力に限るものではなく、親側からの子どもへのポジティブな投影もまた含んでいるといえまふ。このことは、家族内での相互作用が有益か、もしくは有害か、いずれの傾きをなしているのか見分けるのはそう簡単ではないということを示唆しております。投影同一視が、そのポジティブな投影的機能をその限界を超えず全うしているといったふうに、完璧に偏りが無いというのは実に容易なことではありません。それが過剰である場合には、成長してゆく子どもをして、ただ状況に嵌っている限りにおいてのみ愛される、もしくは受け入れられるといった感情を抱かせるかもしれませんし、或いは両親から投影された部分に同一視し、意識的には両親の好みやら価値観に同一視するといったことになりまふ。

われわれは既に、両親が‘完全ではない’と知って子どもが幻滅を味わうことについてはよく承知しております。そして両親の愛情が部分的に自己愛に基づくものであることを知り、さらなる幻滅を覚えるわけでもあります。子どもは自分が自分だから愛されているとばかり思い込んできた事実と訣別しなくてはなりません。しかしまた同じ程度に、子どもは両親の価値観および観念を体現し、それらを自らに反映させてゆくものであります。言うなれば‘家族という伝統を引き継いでゆく’わけなのであります。

青年期において個々の子どもは、こうした幻滅感に反抗というかたちで反応します。青年は両親の同一視から自らを切り離し、彼らとは異なる自らのアイデンティティを樹立させようと格闘するものであります。両親の子育ての熱意といったものは幼少期においては歓迎されたかも知れないにしても、今や侵入的と見做され、両親はしばしば‘旧式’とか偏狭といったふうに非難されることとなります。ほんとうに、或る意味では、投影を通して関係づけられる親たちの有りよう fashion は確かにもはや‘古いもの’なのであり、自立した若い成人から見れば、もはや己れの丈には合わない、そして心理的にも息苦しいといったものでありましょう。

そうした反応は概ね個々の子どもの成長においてごく正常な部分と言えましょうけれども、ルーシーの状況にも似たような子どもですと、いずれその青年期はかなり危険を孕んだものになりかねないと思われれます。そうした彼らの青年期特有の不品行 misbehavior は、過剰な投影同一視に抗っていることを表してはおりません。むしろその底知れない不在を表しているのであります。従って、心無いかつ破壊的なモードを採るだろうことは大いにありそうです。両親の投影を拒絶しているところの青年期の子どもは、その振る舞いにおいて意図的であり、前向き(構成的 constructive)であります。それが傍目にはそうは見えないとしても…。彼は、‘良きもの’として長年に亘って彼に伝えられてきた両親の基準 norm に挑戦しながらも、己れ自身の内なる視座から見ての別の代わりの‘良きもの’を模索しているわけなのです。

これらとの比較において、それまでにポジティブな投影を剥奪されたままで青年期に至った子どもの場合ですと、痛烈な底無しの空虚といったものを心の内に受け継いだまま人生に船出してゆかねばなりません。性の目覚めに差し当たるや、かつての良き類いの情動的な介入 intrusion を惹起しますから、それで過剰興奮を誘う攻撃性へと導かれることにもなりましょう。そこで期待されるべき‘良き介入’は滅多に起こりようがないとして、‘良きもの’といった考えそのものが自己のうちにおいてただ微かにしか樹立されてないとしたら、当然混乱を招く怖れがあります。たとえ他者から真正の良きフィーリングを与えられるとしても、決してそのようなものとして認められることはなく、むしろ心的苦痛を想起させるだけの‘悪なるもの’として攻撃されましょう。その一方で、いかなる興奮も、もしくは‘低俗なスリル’も‘良きもの’と混同されがちであります。例えば薬(強烈な感覚で自己を‘充たし’、失われた愛の投影を呼び覚ますというわけです)、それから乱交、もしくは野蛮な行為といったような…。このように安価に得られるところの興奮は、真の温もりのあるフィーリングの代わりになるように覗われなくもありません。ただ残念ながら、ここで話してまいりました類いの青年期の子どもらは、それらがどう相異なるものか深く考えることは殆どないといえましょう。

同じくそうした彼を取り巻く社会が擁護するところのカルチャーは攻撃されるわけですが、それまでの親密な、投影同一視の心的絆をとおして参加していた家族のカルチャーからそれがズれているせいなのです。従って彼は、己れ自身を取り巻くカルチャーの規範と同一化するのが難しく感じることもなりましょう。

両親からの投影的コンタクトの不在(欠如)というものが青年期の子どもらの問題の唯一の原因と見做していいかどうか、ここでそれを検証する事例はご覧いただけません。明らかにそうした事態を発生させる複雑なコンステレーションの一つの要因に過ぎないからです。しかしながら、これまでに周知とされている事柄にさらなる視座を付け加えるところの意義ある一つの観点かと思われます。特に、何故に或る子どもたちは彼ら自らの内的攻撃性に脆くも傷つきやすいのか、また何故に青年期の子どもの或る者たちは世の中に向けて攻撃的振る舞いをしても何ら失うものなど無いといったふうに自己主張したりするのか、そうしたことをより明らかにするものと思われます。

総括

これまで述べてまいりました事柄を理論的によりいっそう広げてその意味合いについてさらに考察することは価値あるものと思われます。それには3つの観点があると私は考えます。その一つは、子どもは真に‘抱えられている’と感じるためには、強烈に良き親のフィーリング・部分が心の内に浸透し、絶えず子どもの内なる状態を力強くも掌握しているといった具体的な想い phantasy を懐かなくてはならないということです。具体的に経験された良き実体とは、子どもにとって自らの中に入ってきて‘さまざまに煩雑な心を片付けてくれる sort it out’ 力を持っている、基本的に安心をもたらす何かであるといえましよう。子どものころの中に全然入ってゆかない、単なる‘アカデミック’でしかない親側の意図 intention というのは、子どものころに届かず、文字通り‘疎遠な’ものでしかありません。子どもの内へと繰り返し投影された、強い喜びの‘ころのクオリティ’こそが、早期の授乳状況にまつわるさまざまなアンビヴァレンスに耐え、かつその良き対象を子どものころの内に生かし続けてゆくといいいでしょう。従って、良き内的対象を心の内に培うとは、離乳期以前に限定されることではありません。児童期をとおして、ずっとそれは持続してまいります。‘ころのクオリティ’はまずは最初の頃の授乳にその重要性があるわけですが、それ以後も子どもの年齢に相応してのさまざまな母親とのコンタクトの中で甘受されてゆくものといえましよう。

次にお話ししたいことと申しますのは、「投影同一視」が、家族特有の絆を結ぶことを可能にする一つの要因であるということです。それは家族成員それぞれを互いに深いレベルで同一化させ、つまりは自分以外の他者の喜びやら悲しみに‘寄り添い生きる’ことを、そして生涯続くところの絆で結ばれた者同士として互いを見ることを可能にする、そうした機能を孕んでいるのです。これらの長所(有利な点)とは、家族成員がそれぞれ互いに良きフィーリングを浸透させてゆけるということであり、そうすることで互いに何ら影響を及ぼすことのない単なる‘良き意図 good intention’とは違って真のサポートを提供し得ることでありましよう。また、その短所(不利な点)となるのは、投影同一視というものが‘原初的な心的混迷 primitive psychic muddle’に陥らせるということがありますから、家族生活を脆弱かつ傷つきやすいものにしてしまうことでもあります。この場合の‘混迷’と言いますのは、家族それぞれの相互間の精神的な境界が混乱してしまっていたり、それぞれ個々のメンバーがそれぞれに個性化しようとするならば家族という群れは消失してしまうと恐れている場合に得てして起こりやすいといえましよう。

人間の家族にとってのチャレンジというのは、それぞれ各自が個性化 individuality によって豊かになってゆくことをどう学ぶかということにあります。しかも逆説的ではありますが、それはさらなる投影的および摂り入れ的な心のプロセスをとおしてしか起こり得ないのであります。

人間の歴史を一望しますならば、そうしたことを支持してくれているような、数多の興味深い事実が目にとまります。例えば、16世紀では屋敷内には廊下はありませんでした (Stones, 1986)。そして家族以外にも大勢の人たちが同居しておりましたし、大勢の召使いも一緒でしたわけです。それで誰もが家中をあちこちへと方向を違えて移動するときは他の人の部屋を通り道にするのはごく普通のことであったのです。実際に、こうした場合いかなる意味でもプライバシーは持てませんし、そしてまた実際にはすべて必要なものは他の誰もがいるところで話し合わねばならなかったというわけです。この室内での身体的な境界の欠如は、当時はまだパーソナル及び心的なレベルでの境界 boundaries を把握するに至っていなかったという事実を反映しているように思われます。

ここで最後に述べておきたいと思われまことは、「投影同一視」とは望ましくない‘防衛’をはるかに超えるものであって、それはより広い意味でポジティブな機能を持っているということでもあります。その最も重要な一つとして挙げられるのは、おそらく「償い」の原初的で前駆的なもの the primitive forerunner to ‘reparation’」かと思われまします。すなわち、良き癒しの心的実体が他者の心へと入り込んでゆくといった心の想いでもあります。

26 Downshire Hill
London, NW3 1NT

参考文献

- Bion, W.R. (1962) Learning from Experience. London: Heinemann.
Klein, M. (1957) Envy and Gratitude. In: Collected Works, Vol. III. London: Hogarth.
Stone, L. (1977) The Family, Sex and Marriage in England 1500–1800.
Great Britain: Penguin Books.
Winnicott, D.W. (1976) The Maturational Processes and the Facilitating Environment.
London: Hogarth.

《原典; 【Maternal Love and Positive Projective Identification】

by Meira Likierman

Journal of Child Psychotherapy, 1988. Vol . 14 No. 2 》

【訳者あとがき】

山上 千鶴子

このユニークな論文の和訳を試みたのは、個人的にとっても愉快を覚えたからだ。それは、【ペピの観察記録】の《振り返りの記》で書き綴ったペピの母親 (Mrs. P) の特性ともいえる「母性的抱擁力 (maternal containment)」、殊に《面白がる能力》(the capacity for pleasure) との絡みである。

この論文を一読して、Meira Likiermanのメッセージを敢えて要約するならば、＜母親として恐れずにあなたの子どもに開けっ広げに自らの‘思い’を伝えなさい＞といった促しであり、励ましでもあろう。殊に＜自らの喜びを臆せず・・＞ということである。それこそが何よりも子どもの‘心の糧’となるものだから・・。＜何故赤ちゃんって、あんなにキャキャって笑うのかしら？＞というのが私の長年心に抱いていた疑問である。嬉しくてたまらないといったその顔付きを眺めながら、こちらも一緒になって嬉しくなる。われわれはそんなふうは無垢で無邪気であることを恐れてはなるまい。それを、子どもが生きることの苦痛に耐えかねての「躁的防衛 manic defense」、もしくは「小児万能感 infantile omnipotence」とする見方もあろうが、事実確かにそれが羨望やら侮蔑、そして対象の脱価値化へと繋がってゆくこともあろうけれども・・。子どもはただ嬉しくてたまらないといった「いのちの讃歌」を、そのからだ、そしてところが謳っていると思っただけとはいけないだろうか。母子関係においても、この‘嬉しくてたまらない’子どもに寄り添って、そのいのちの喜びに共振し、母親もまた一緒に‘嬉しくてたまらない’といったことがあってもよからう。そうしたことが愚かしく思え、臆してしまうとしたら、何やらモッタイないではないか。そんなことを Meira Likiermanは語っているように思われる。たとえ‘生の衝動’と‘死の衝動’との相克に心きまませ、そして折々に孤独に打ちひしがれるのが本来のわれわれだとしても、それでも尚、《喜ぶ能力 the capacity for enjoyment》を諦めず手離さないでいることが肝要だということ。そのように提唱するメラニー・クラインに彼女は深く共鳴しているのであろうか。このMeira Likiermanの素朴さがとてもいい。どうやらクライン派の流れを汲む一人でありながら、得てしてありがちな硬直した、かつ辛辣といった印象からはほど遠い。現実感覚 (reality sense) が際立っている。逆説的だが、ここにクライン派のひとつの成熟を感じさせられた。

確かにMeira Likiermanの指摘にもあるように、「maternal containment (母性的なコンテインメント)」という概念はそもそもどちらかというと‘受容する器’といった受け身的 passive な印象がある。コンテインメントを‘抱擁力’と敢えて和訳したとしても、その感じは否めない。この論文では、コンテナー-container としての母親を、それ自身の‘生きている現実 reality’に肉迫し、より現実味 (reality sense) を帯びた、アクティブな存在として描いている。悲喜こもごもに・・。母親は一人のパーソン (個人) として見做され、容認されているわけだ。その上で尚も、母親とは子どもに‘いのちの糧’を与え、それ自身の‘いのちの息吹’を吹き込んでゆく存在であることが示唆される。すなわち彼女自身が醸し出すもの、つまり‘こころのクオリティ’が子ども心に感受されてゆく、それこそがまさに親であることの醍醐味なのだというをどうやらMeira Likiermanは語りたかったもののように思われる。

この論文中、‘psychical quality’、‘mental quality’、そして‘emotional quality’という言葉が頻繁に出てくるが、クオリティ quality というのがほとんど和訳不可能である。非言語的なものだからだろう。だが、おそらく‘こころのクオリティ’とは、こころが奏でる、もしくは醸しだすところの感觸、温もりみたいな・・、或いは‘音色’とか‘響き’といってもいい、総じて‘思い’なのではなかろうか。日本人には大いに馴染みのある言葉であり、基本的心性ともいえる。因みに、日本語に「薫染(くんせん)」という言葉があるが、本来「お香のよい薫りを衣服に染み込ませる」といった昔ながらの奥床しい風習をいうようであるが、それは転じて「よい感化を受けること・及ぼすこと」をいうらしい。Meira Likiermanのいうところの《positive projective identification》とはこの謂いであろうか。これが心理臨床、特に母子関係に纏わりつくところの関係性に大きくクローズアップされている点がユニークといえよう。

イギリスという厳格さを重んじる抑制的な文化では、「子ども」という存在は若輩者・半端者といったふうにかつて侮蔑されている傾きがあるのは否めない。彼の地で子どもであることはなかなか辛いものがあるというのが私の率直な印象であった。だから、子どもそれ自身の‘生きている’現実に寄り添い、喜びも愚かしさをも共有できる大人がいて、もしもその大人が‘親’であるとしたら、さらには‘心理臨床家’でもあったとしたら、そこにむしろ成熟した文化を感じさせられる。ペピの母親(Mrs. P)がユニークであり、だがおそらく稀有でマイナーな存在であるとしたら、Meira Likiermanもまた同様なものかもしれない。だがここに、疑いようもなく何かしら変わろうとする予兆を覚えた。これ迄【精神分析】において金科玉条とされてきた憾みのある《Passive and Neutral(受け身的かつ中立的)》といった臨床スタンスはもはや放棄されねばならない。アクティブ active であることに怯んではならない。そして心理臨床の場面に限らず日常生活においても、われわれは自己吟味と内省を怠らず、だが臆せず他者に対して真摯にそして快活にわれわれ自身を与えられるといい。その意味でもわれわれ大人は子どもに対してもっと‘愚かしくも嬉しい’存在になれるよう、心底願わずにいられない。子どもが‘愚かしくも嬉しい’存在になれるためにも・・。

さて、Meira Likiermanには、これ又ユニークな著書がある。【Melanie Klein: Her Work in Context】Continuum 2001 である。どうやら「クライン派の系譜」にハンガリー生まれの精神分析家 **Sandor Ferenczi** (シャンドル・フェレンツイ) (1873-1933)を復活させんという狙いがあるらしい。メラニー・クラインの思考の変遷を辿り直し、フロイト(S. Freud)およびアブラハム(K. Abraham)にも慎重に目配りしつつ、うまくバランスを取りながら、敢えて彼女の中に‘先導者’としての **S. Ferenczi** の痕跡を浮き彫りにし、独自のメラニー・クライン像を提示しているように覗かれた。何よりもそこにはメラニー・クラインの‘思い’の流れがよく汲み取られている。そしておそらくこの1988年のMeira Likiermanの論文は、その‘前哨戦’であったものと思われる。そうした彼女のこだわりから推して、この論文のタイトル【Maternal Love and Positive Projective Identification】は、もしかしたら **S. Ferenczi** その人、それにその臨床家としてのスタンスもまた表象されているのかも知れないといった感がある。メラニー・クラインの《the capacity for enjoyment》にしても遡ればそこに辿り着くだろうし、おそらくピオンの《reverie(もの思い)》にも通底している。

今や東西を問わず、【想像力 (the projective power of the mind)】こそが試されている。われわれは誰しもが根本的に‘おもいびと’であるということを忘れがちではないか。この現代において、思いを掛け合うこと・思いを寄せること・思いを通わすこと、そうした心性が廃れ、涸れてゆくことの危惧の念は募るばかりだ。そのためにもわれわれは闘わねばならない。【心理臨床】はまさにそのフロンティアである。

ここで一つ個人的にこの論文から励ましをもらったことを書き添えたい。最後のパラグラフで Meira Likierman は Projective Identification のポジティブな機能の最も重要な一つとして「‘償い reparation’ の原初的で前駆的なもの primitive forerunner」を挙げているが、これは実に興味深い。瞠目に値する。ここからさらに推し進めるならば、その視界に私の提唱する【贖いの器 (atonement)】の心性が拓かれてゆく感がある。これこそが【クライン派精神分析】の新たな地平とは言えまいか。ここしばらく眠りの闇の中に凍てついていた私の中の‘楽観’が俄然目覚めた。この訪れを喜ぼう！

尚、私は【タヴィストック】在籍中に Meira Likierman と面識を得たことはない。彼女の経歴の詳細は不明だが、現職は下記のとおりであるらしい。

Dr. Meira Likierman;
Consultant Child and Adolescent Psychotherapist, member of
the Infant Mental Health Team, Tavistock Clinic London.

(2014/10/20 記)
